

平成二十二年後期日程 入学試験問題

小論文 D

教育学部

学校教育教員養成課程

美術教育系

美術選修……………1～4ページ

情報文化課程

アート文化コース……………5～7ページ

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ② この冊子には課程・選修・コース別に問題が出されているので、選択を間違えないようにしなさい。養護教諭養成課程は裏表紙を見なさい。
- ③ 解答は、別紙の解答用紙に、指定字数に従って、縦書きで記入しなさい。
- ④ 受験番号は、解答用紙一枚ごとに指定の欄に記入しなさい。
- ⑤ 解答用紙の「問いの番号」の欄に、「問一」または「問題一・問一」のように記入してから答えなさい。
- ⑥ 冊子内の課程・選修・コース別の中表紙に注意書きがあるので、解答する前に必ず読みなさい。

学校教育教員養成課程

美術教育系 美術選修

注意

問題一は解答用紙(その一)、問題二は解答用紙(その二)を用いて答えなさい。

問題一 左の図版で示した作品について以下の問いに答えなさい。

問一 作者は誰ですか。次の中から該当する記号で答えなさい。

- ① 雪舟
- ② 喜多川歌麿
- ③ 歌川(安藤)広重
- ④ 葛飾北斎
- ⑤ 狩野山楽

問二 制作時代はいつですか。次の中から該当する記号を選びなさい。

- ① 室町時代
- ② 安土桃山時代
- ③ 江戸時代
- ④ 明治時代
- ⑤ 大正時代

問三 この作品の種類は何ですか。次の中から該当する記号を選びなさい。

- ① 障壁画
- ② 絵巻物
- ③ 掛け軸
- ④ 浮世絵
- ⑤ 仏画

問四 この作品の技法は何ですか。次の中から該当する記号を選びなさい。

- ① 水彩画
- ② 木版画
- ③ 油彩画
- ④ 銅版画
- ⑤ 水墨画

問五 この作品に描かれている様子を述べなさい。(二〇〇字以内)

問六 この作品の右側下部に富士山が小さく表現されています。どうして右側下部に小さく表現されているかの理由を①構

図や動勢(ムーブマン)、②富士山のイメージという二つの観点から自分なりに考えて書きなさい。(二〇〇字以内)



(『富嶽三十六景』Ōta Memorial Museum of Art, 2005)

問題一

近代の彫刻作品は、人体の肌の色のような対象の色彩を再現しないで、地味な単色にして仕上げるのが普通です。それはなぜだと思いますか。あなたの知っている近代の彫刻作品を例に挙げて、その理由を説明しなさい。①作品の例、②対象の色を再現しない理由、③地味な単色であることの理由がはっきりわかるように書きなさい。なお、近代の彫刻とは一八五〇年から一九五〇年あたりまでに制作された作品と考えて下さい。(四〇〇字以内)

情報文化課程

アート文化コース

注意

解答用紙(その一)を使って解答すること。

問題 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

日本には、古代や中世の人々がエネルギーを傾けて造った仏像が多数遺^{のこ}っている。お寺で、あるいは展覧会で、そのような仏像に親しむ機会も多いだろう。展覧会での仏像はその美しさが鑑賞される。この場の仏像は美術と叫ぶ。一方で、美術史を専攻する私たちが仏像を研究対象とするとき、仏像は美術ではないという言い方で批判を受けることもある。もちろんそこには仏像は信仰の対象なのだからという意味が込められている。では美術と信仰の対象という二つの見方は相反^{そうはん}するものなのだろうか？

美術という見方が仏像が造られた時代になかったのはもちろんだ。しかし、美術とは何かをつきつめてゆくと、人間が「何か」を眼に見えるかたちに表現したものと定義できる。この「何か」に相当する部分には、信仰だったり、風景だったり、人間の内面だったりという具合にいろいろなものが入ってくる。「表現」を英語にすると「representation」となるが、イギリスで活躍した美術史家、E・ゴンブリッチ(一九〇九—二〇〇一)はこの「representation」という言葉こそが美術(芸術)の重要な役割を示すと論じている。ゴンブリッチの考え方によれば、「representation」には二つの側面がある。一つは「描写」であり、もう一つは「代替」だ。つまり、美術とは、何かを描いたものであるということに加えて、何かの替わりになるものとすることもできる。

このような考え方をもとに、仏像について振り返ってみるとどうなるだろう。そこで思い当たるのは、仏像はけっして仏そのものではないということである。少なくとも古代の人々はそのように見ていない。本来は見ることでできない仏を「描写」し現世^{げんぜ}に再現することが、仏像を造るときに彼らの基本的な動機だ。それはまた仏像を、仏の「代替」とみなすことでもある。このことに思い至ると、仏像とは間違いなく「representation」であるということが出来る。

仏像は仏そのものではない。仏像を信仰した当時の人々にとって仏像はあくまでも仏の仮象^{かしょう}でしかない。しかし、仏像はまぎれもなく「信仰の対象」^Bであった。仏像は祈りを捧げる^{たか}ために造られる。つまり彼らは、その祈りをいかにリアルなものにするかという命題に向かって、エネルギーを傾け仏像を造るのだ。創造的な仕事を生む強い動機はそこにこそ存在していた。した

がつて、美術を創造的な表現とする、今日一般の意味で捉えたとしても、仏像は正しく美術であるといふことができる。

〔長岡龍作『日本の仏像』中央公論新社、二〇〇九年、i～iii頁。一部手を加えた部分がある〕

問一 傍線Aについて、美術作品を例にあげて、作品の「描写」と「代替」の役割の違いや関連について説明しなさい。(三〇〇字以内)

問二 傍線B、Cのように筆者は、仏像が「信仰の対象」でありながら「正しく美術である」と述べています。それについてあなたはどうか考えますか。信仰と美術の条件について触れながら、具体的に述べなさい。なお筆者の意見への賛否については、採点に影響しません。(三〇〇字以内)